The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞福田安典著『医学書のなかの「文学」江戸の医学と文学が作り上げた世界』
Author(s)	岡部, 祐佳
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 181-182
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70996
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

福田安典著『医学書のなかの「文学」江戸の医学と文学が作り上げた世界』

岡　部　祐　佳

本書は、福田安典氏の手になる、医学書・本草書を用いた近世文学研究の成果をまとめたものである。以下に、本書の構成を目次に拠って示す。

序章　医学書のなかの「文学」

第一章　それは「医学書」なのか、「読み物」なのか

はじめに／第一節：愉快な書物―「読み物」／第二節：『医者談義』談義―人文学と自然科学という対立を無化する書物／第三節：医学書に擬態する文学作品たち、さまざま／第四節：江戸のカルテ、医案の世界―『武道伝来記』にみる西鶴のねらい／第五節：江戸以前の医学の文芸―御伽草子『不老不死』／第六節：「医学書」と「読み物」の間にある幻想／第一章注

第二章　江戸期を通じて愛されたヤブ医者、竹斎

はじめに／第一節：『竹斎』のモデルは誰か―曲直瀬流医学と関わって／第二節：『竹斎』作者・富山道冶の家―仮名草子のふるさと／第三節：「芸能者」としてのヤブ医者―唄われた竹斎／第四節：『竹斎』と文化圏が重なる『恨の介』―戦国期の医師について／第五節：江戸文芸の発展を映し出す、御伽の医師の「書いた物」／第二章注

結章　近世文学の新領域

コラム　医学書のある文学研究室から―いかなる手順で医学書を操ったか

あとがき

図版一覧／初出一覧

書名索引／人名索引／地黄索引

中醫經典被「另類改編」成娯樂刊物!?［陳羿秀］

Breaking boundaries between literature and medicine［ボグダン真理愛］

序章では、上方初期洒落本『本草妓要』を足掛かりに、文学作品と医学書との親和性を指摘し、「医学と文学という対立構造、医学書と読み物という取り合わせへの違和感などの先入観」を外さなくては見えてこない、豊饒な世界への可能性を示唆する。

第一章第一節では、『医者談義』が、文学史と医学史の両領域において資料として儘取り上げられることに着目する。『医者談義』の叙述姿勢や医学的見解は医学側の文献を踏まえたものであるが、挿絵などには文学的価値をも認め得るとする。そして第二節においては、そのように多分に医学的内容を持つ『医者談義』が、談義本の体裁を取る理由について、初心者教訓のために文学書の体裁を利用したと結論付ける。第三節ではそれとは逆の方向性、つまり「読み物が医学書に擬態する」作品について、談義本『教訓衆方規矩』を皮切りに、浮世草子・本蔵綱目物・医家書生

の戯作・漢詩文等多様なジャンルにわたり概観し、その共通の前提として、作者・読者の双方にある程度医学書や本草書に関する知識があったことを指摘する。第四節では、その前提としての医学知識の存在を認めた時、出現する新たな文学作品読解の可能性について、『武道伝来記』巻五-一「枕に残る薬違ひ」に描かれる「種方付」を例に取り、その一端を示す。第五節では、江戸期以前に医学記事を新趣向のスパイスとして作中に盛り込む文学作品が見られることを、御伽草子『不老不死』を例に示す。さらにそのような書物が、医学書も取り扱う草子屋などを通して読者層を拡大していったという可能性も指摘する。

続いて第二章では、仮名草子『竹斎』を中心に、系列作品や周辺資料について、特に曲直瀬流医学を視座に論ずる。第一節では、作者・富山道冶が学んだ曲直瀬流医学の祖・道三、および道冶の師・玄朔の事跡を重ねて『竹斎』を読み解く。作中前半の東下り・京見物には、「竹斎を名医曲直瀬に対峙させ、その栄光を冷ややかに嫉む貧苦の藪医者として描く」という意図が、後半に描かれる竹斎の藪治療には、曲直瀬流医学を誤用させたり誇張したりすることにより、滑稽味を生じさせるという効果があるとする。さらに『竹斎』の背景には、道三ばなしの流行と、曲直瀬流を標榜する現実の藪医者達の失敗談から生まれた、「竹斎伝説」という存在があると推測する。第二節では、『竹斎』作者・富山道冶の家である富山家について述べ、富山家の持つ財力・文芸の気風、地の利、文化的知的土台が、『竹斎』を生み出す大きな原動力になったと考察を示す。第三節では、竹斎物に描かれる藪医者が、「芸能者」とつながるという共通点を持つことを指摘し、『竹斎』およびその亜流作品と芸能との関連について述べる。第四節では、『竹斎』と『恨の介』の持つ文化圏の重なりについて、『恨の介』の作者が曲直瀬のライバル、医家・竹田家周辺に想定し得るという可能性から論じる。第五節では、曲直瀬や竹田といった御伽の医師たちの「書き物」の世界とその発展の過程について、『竹斎』を中心に述べる。そしてその過程の多様性を支えるのは、そこに内在する、医学と文学のコラボレーションであるとする。

結章では、近世期当時、既に医学書と文学書の区別は接近し揺らいでいた可能性を指摘し、近世期の統合的文化の有り様を理解するための、ジャンル越境的研究の必要性を提言する。

以上が序章から結章までの概観である。本書はこの他に、論中で触れる医学書の簡略な解説を記した医学書メモや、英文・中文アブストラクト、そして自ら医学書を用いた文学研究の「「手の内」を明かす」コラムなどを収録する、充実した内容となっている。

我々がこれまで見ていたのは、近世文学という大海原のほんの一部だったのかもしれない。本書が、まだ見ぬ果てしない外海へと我々を誘う水先案内人となることは、もはや明白であろう。

（笠間書院、平成二十八年五月、二七六頁、二二〇〇円＋税）

（おかべ・ゆか　／本学大学院博士前期課程）